

像としての常識：『确实性の問題』と世界像

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学教養教育リサーチセンター 公開日: 2016-06-15 キーワード: 作成者: 大谷, 弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/54

像としての常識——『確実性の問題』と世界像——

大谷 弘

1. はじめに

ウィトゲンシュタインが『確実性の問題』(以下『確実性』)において、我々の常識の中の根本的な事柄を「世界像」と呼んだことはよく知られている。通常、この「世界像」は命題的なものであると考えられている。これに対し本稿では、世界像は命題ではなく、文字通り「像」として捉えるべきであると論じる。すなわち、我々の常識の中には確定した真理条件を持つ命題としてではなく、大雑把な物の見方を表現する像として特徴付けられるべきものが存在すると考えられるのである。

以下、まず二節において『確実性』の主題である「常識」の客観的確実性の本性についてのウィトゲンシュタインの見解を簡単に見る。その際、『確実性』で大きな役割を果たしている文と命題(記号とシンボル)の区別についても確認しておく。次に三節において、「私は知っている」という表現の使用についてのウィトゲンシュタインの見解を検討し、「世界像の確認」と呼ばれるべき使用をウィトゲンシュタインが認めているということを見る。そして四節で、世界像が命題ではなく像として理解されるべきであると論じ、五節で『確実性』にそのような方向の思考が見出されるかを検討する。最後に六節で結論として「像としての常識」の意義について述べる。

2. 蝶番、記号とシンボル、意味不明

『確実性』においてウィトゲンシュタインは、ムーアの「私はかくかくのことを知っている」という表現の使用や、懐疑論者の「しかじかのことは疑わしい」という表現の使用は奇妙であると指摘している。ウィトゲンシュタインがそのような指摘を通して示そうとしているのは、ムーアが「私は知っている」と言い、懐疑論者が「疑わしい」と述べる事柄が、通常の知識や懐疑の対象となるような事柄とは異なる、特別な確実性を持つということである。ウィトゲンシュタインはこの確実性を、主観的な確信と区別して、「客観的確実性」と呼んでいる(OC 194, 270)。すなわち、『確実性』の主題の一つは、この客観的確実性の本性を理解することにあるのである¹。

しかし、ムーアや懐疑論者による表現の使用が奇妙であるということからは、それらが誤った使用であるとか、ナンセンス(無意味)であるとかいうことがただちに帰結するわけではない。確かに、普通の人々は、誰もが見えるところに手をかざし「私はここに手があると知っている」と述べたり、そのことを「疑わしい」と言ったりはしない。しかし、ムーアや懐疑論者は「哲学者」であり、哲学者は常識に囚われずに真理を追求しているため、一見すると奇妙な言語使用を行うことになってしまう、というだけのことかもしれないのである。従って、単にムーアや懐疑論者の言語使用が奇妙であり、「普通と違う」ということだけから、彼らが誤った哲学を展開していると言うわけにはいかないであろう。

ムーアや懐疑論者が問題としている事柄の持つ客観的確實性は、単にそれらに対する知識の主張や疑いの奇妙さに基づくのではなく、それらの事柄が我々の実践において枠組みとしての役割を果たしているということに由来するという点について、ほとんどの解釈者は一致している。すなわち、それらの事柄は我々の実践がそれにより支えられている「蝶番」であり、この蝶番としての役割が、客観的確實性の本性であるとされているのである²。

しかし、ある事柄が我々の実践の枠組みとなっているということは、なぜそれについて「知っている」とか「疑わしい」と言うことが不適切だということを帰結するのだろうか。この点について、標準的な解釈の下では、「そのように言うことは我々の実践の意味を規定する文法に違反しているからだ」と説明される。すなわち、蝶番を确实と見なすことは、我々の認識実践における文法規則であり、蝶番に対し「知っている」とか「疑わしい」と言うことはそのような文法規則違反のナンセンスを産むことになり、不適切であるとされるのである³。

このような解釈は標準的ではあるが、『確實性』を丁寧に読むならば受け入れ可能な解釈ではない⁴。『確實性』において、ウィトゲンシュタインは蝶番に対する懐疑や知識の主張に対し、「それは文法違反のナンセンスである」とは言っていない。ウィトゲンシュタインは多くの場合、それらによって述べられていることが「不明確」であると言う。ウィトゲンシュタインが問題としていることを理解するためのキーは、ウィトゲンシュタインが音声や文字のユニットとしての言葉と、実際に特定の実践の場で使用され、理解されているものとしての言葉のギャップに焦点を当てているということに気付くことにある。前者を「記号」、後者を「シンボル」と呼ぶとすると、ウィトゲンシュタインはある言葉を記号として理解していることが、シンボルとしてのその言葉の理解を保証するわけではないという点に注目しているのである⁵。

この記号とシンボルの区別は、発話の基本単位に注目するならば、構文論的ユニットとしての文と意味論的ユニットとしての命題の区別に対応する。例えば、太郎と花子がハワイ旅行をする前日という状況を考えてみよう。いま近所のコンビニに出かけようとする太郎に向かって、花子が「雨が降っているよ」と言い、太郎は「あ、そうか」と傘を手に取りろうとする。ところが、花子はテレビでやっていた世界の天気予報を見ていて、ハワイで雨が降っているということを伝えようとしていたので、「いや、そういう意味じゃなくて、ハワイで雨が降っているってということだよ」と訂正する。この場合、太郎は花子の発話した「雨が降っているよ」という文（記号）を理解しているのだが、この文が表している命題（シンボル）——ハワイで雨が降っているということ——を理解し損ねたのである。

ウィトゲンシュタインにとって、命題を把握することとは、現実の言語ゲームにおける言語使用を理解することである。そして、ウィトゲンシュタインには、記号としての文の理解が、その使用（シンボル）の理解を保証しないということが、多くの場合哲学的な混乱を生み出すと思われたのである。『確實性』においても、ウィトゲンシュタインが問題としているのは、この記号とシンボル、文と命題のギャップである。ウィトゲンシュタインが蝶番に対し、「疑わしい」とか「知っている」とか言うことが「不明確」であるとするもののポイントは、「疑わしい」や「知っている」が馴染みのある言語の文であり、記号としては理解されるとしても、それがどのようなシンボルとして現実の言語ゲームの中で機能しているのかを理

解できないということにあるのである。

ポイントは、蝶番を「疑わしい」とか「知っている」と述べる人を文脈独立の抽象的な理論を述べる人ではなく、徹頭徹尾、対話相手として扱うということにある⁶。すなわち、蝶番を「疑わしい」とか「知っている」と言う人に対し、我々は何を言っているのかわからない、「意味不明だ」と感じるという点をウィトゲンシュタインは指摘しているのである。そして、このように見たとき、懐疑論者やムーアの言葉を「文法違反のナンセンスだ」と断罪する解釈には、明らかに問題がある。というのも、対話相手の言葉を理解できないときに、いきなりそのように断罪することは、対話の参加者としてあまりに非協力的な態度だからである。我々は生産的な対話を望むなら、対話相手が何を言いたいかわからないときには、「どういう意味なの？」と更なる意味の説明を求めるべきなのである。

従って、蝶番の客観的現実性は、それが標準的な解釈が考えるような仕方では文法規則であるということに基づくのではない。蝶番に対して、「疑わしい」と言うことの不明確さに注目し蝶番の客観的現実性の本性を特徴付けるとするならば、それは蝶番に対し「疑わしい」と言われたとしても、その実践における疑いと証拠の秩序が現在のところ我々の理解可能な秩序と異なっているため、その言葉が意味不明になってしまう——そして、そのためその言葉に基づいて行動できない——ということに存するのである。そして重要なのは、「現状で意味不明である」ということは、「将来も意味不明である」ということを必ずしも含意しないということである。すなわち、我々は蝶番に対する疑いが十分に理解可能となるような文脈に将来身を置くことになるという可能性は常にオープンなのである。

3. 「私は知っている」の使用について

前節では蝶番の客観的現実性、すなわち、その特別の「疑えなさ」は、蝶番に対して「疑わしい」と言うことが、我々の習得している言語ゲームでは意味不明になってしまうという点に存するとした。次にこの節では、蝶番について「私は知っている」と述べることの不適切さ——これは『確実性』において繰り返し検討される主題である——がどのようなものなのかという点を検討したい。

まず『確実性』において、ウィトゲンシュタインがどのような点でムーア的な「私は知っている」が奇妙であるとしているのかを確認しておこう。『確実性』において、ウィトゲンシュタインは「私は p と知っている」という表現が日常の言語ゲームにおいて適切に使用される条件を描いている。ウィトゲンシュタインが挙げる条件は①その主張の主体が知る位置にあるということを示す用意がなければならず、従って、証拠を持つことか専門的能力を持つ（その問題となっている事柄について学んでいる）ことを示す用意がなければならない（OC 243, 432, 438）、②p は聞き手にとって情報量があると考えられるものでなければならない（OC 100, 468）③p の証拠として提示されるものは、p よりも認識的に強力でなければならない（OC 243, 245, 250）、④その知識主張は探求の可能性と結び付いていなければならない（OC 23, 372）、⑤~p である可能性が理解可能でなければならず、「私は p と知っている」が間違いである可能性が存在しなければならない（OC 66, 70-1, 370）といったものである⁷。

ポイントは、認識に関わる (epistemic) 現実性を述べるものとしては、ムーアの「私は知

っている」の発話を理解できないということである。すなわち、認識に関わる確実性が主張されていると理解しようとすると、ムーアの発話は意味不明なものになってしまうのである。というのも、認識に関わる確実性は、例えば証拠や情報量といった観念と結び付いていなければならないが、ムーアが引き合いに出す事柄は、我々がそれに対し認識的な関わりを持つものとしては理解不可能なのである。

ウィトゲンシュタインは客観的確定性を示す表現として、「私は知っている」を用いることはミスリーディングであると考え、「確固としている (feststehen)」といった表現を用いることを検討する (OC 116, 151)。しかし注意すべきは、「私は知っている」ではなく「確固としている」を勧めるウィトゲンシュタインのポイントは、蝶番に対し「私は知っている」の使用を禁止することにあるのではない、ということである。「私は知っている」という言語表現はそれ自体として見るならば、単なる記号であって、この記号がどのようなシンボルとして用いられるかという点について、哲学者が独断的に制約を与える権利を持つわけではない。「私は知っている」という記号が特定の言語ゲームにおいて使用されることに先立ってそれ自体として使用法を確定させており、それに合致した仕方では我々はその記号を使用せねばならないという描像は、まさに後期ウィトゲンシュタイン哲学の批判する描像である。前節でも述べたように、ウィトゲンシュタインが注目するのは、記号とシンボルの間にギャップが存在するという点であり、「私は知っている」を蝶番に対して適用することの問題は、それが認識に関わる内容を示すシンボルとして用いられているという誤解を招きやすいという点でミスリーディングだということにあるのである。

実際、『確実性』の特に後半において⁸、ウィトゲンシュタインはムーアの「私は知っている」の使用が理解可能となりうるのではないかという点をたびたび考察する。例えば、次の節を見てみよう。

「私はこれが手であると知っている」はムーアの意味では、次のようなものと同じ、もしくは何か類似したことを述べているのではないだろうか。すなわち、私は「私は手に痛みを感じている」「この手の方がもう片方の手よりも力が弱い」「私は以前にこの手を骨折した」といった無数の発話を言語ゲームの中ですることができるが、その際にこの手の存在は疑われない、ということを述べているのではないだろうか。(OC 371)

このような節においても、ウィトゲンシュタインはムーアの「私は知っている」が認識に関わるものとなると考えているわけではない。ムーアの挙げる事柄が蝶番であって、少なくとも現状では認識に関わる文脈に理解可能な仕方では置かれうるものではないという点についてウィトゲンシュタインは一貫している。ウィトゲンシュタインが問題としているのは、我々が確実としている事柄を確認するという言語使用を行っているものとしてならば、ムーアの「私は知っている」は——ミスリーディングであるかもしれないが——理解可能なものとなる、という点である。すなわち、我々の「世界像の確認」とでも呼ぶべき言語使用があるという点をウィトゲンシュタインは問題としているのである。

4. 世界像は命題か

ここで問題となるのは、「私は知っている」と言うにせよ「確固としている」と言うにせよ、その対象は何かということである。「私はかくかくのことを知っている」「かくかくのことは私にとって確固としている」と言い、この「かくかく」が蝶番であるとき、それは何なのだろうか。前節で、この種の言語使用を「世界像の確認」と呼んだが、この「世界像」とは結局のところどのような身分を持つものなのであろうか。

通常、世界像、あるいは蝶番は、命題であると考えられている。実際、「世界像命題」や「蝶番命題」といった表現により、『確実性』の諸節は解釈されることも多い。トマス・モラウエッツは更に進んで、それが「知識」であるとする。彼は知識が存在するときは常に「私は知っている」と言うことにポイントがあると素人哲学者は誤って考えてしまうと言う (Morawetz, 2005, p.165)。すなわち、知識が存在するのに「私は知っている」と言うことはポイントを欠くことがあるとするのである。

しかし、哲学的に汚染されていない素朴な感覚からすると、知識について語ることがポイントを欠くときにも知識が存在すると主張することはやや奇妙である。例えばムーアの「私はここに手があると知っている」という発話を考えてみよう。ムーアは聴衆の誰もがはっきりと見えるところに手をかざし、このように発話した。この発話は通常知識主張として理解しようとする、根拠が問題とならず、また情報量を欠くという点で理解不能である。そしてまた、聴衆の一人が「ムーアはそこに手があると知っている」と言ったとしても同様に意味不明である。というのも、聴衆にとってもまた伝えるべき情報や根拠が存在しないからである。そしてそうであるとするならば、「ムーアはそこに手があると知っている」ということでムーアに知識を帰属できる人などいるだろうか。モラウエッツはムーアの知識主張はポイントを欠くとしても、ムーアは知識を持つとする (Morawetz, 2005, p.180)⁹。しかし、そのように「ムーアはそこに手があるという知識を持つ」と有意義に語ることは誰なのだろうか。

ここでありうる一つの答えは、「それはムーアの発言を吟味している哲学者だ」というものである。すなわち、通常言語実践における対話として見た場合、ムーアの「私はここに手があると知っている」という発話や聴衆の「ムーアはそこに手があると知っている」という発話は理解不能であるが、哲学的吟味という特殊な文脈では「ムーアはそこに手があると知っている」ということでムーアに知識を帰属することができるのである。

しかし、この答えには二つ問題点が存在する。まず第一に、ウィトゲンシュタインは知識成立の条件として、知識主体が根拠を与える用意があるということを要求しているが、「ここに手がある」のような発話に対しては、根拠を問題とすることができず、知識が成立しているとは考えられない。そして第二に、そもそも「ここに手がある」という文(記号)が、どのような命題を表しているのか不明確だということがある。いまムーアが誰もがはっきりと見えるところに手をかざし、「私はここに手があると知っている」ではなく「ここに手がある」と言ったとしよう。このとき、このムーアの発話した文がどのような命題を表しているかは明確だろうか。何の脈絡もないところで「ここに手がある」と言われたら、我々は途方

にくれて「どういう意味なの？」と尋ねるほかないはずである。

これに対して、「発話のポイントはわからないとしても、それが何を意味しているかは明確だ。つまり、ここに手があるという事態を意味しているのだ」と言われるかもしれない。しかし、これは文を口にすれば、言語ゲームにおける使用を考慮せずともその文に対応する事態がその文の意味として存在するというような哲学的実在論に汚染された議論であろう。

この第二のポイントは、「蝶番」や「世界像」と呼ばれるものが知識であるかという点だけでなく、そもそも命題なのかという点に疑問を抱かせる。通常の場合で言われた「ここに手がある」や「地球は100年前から存在している」といった文はいったい何を表しているのだろうか。ここまで「蝶番」「世界像」といった語によりそれらの特徴付けてきた。しかし、いったいそれらはどのような身分を持つものなのだろうか。ここではまず『確実性』のテキストが何を言っているのかという点をいったん脇において、この問題を考察してみたい。すなわち、ウィトゲンシュタインがこの問題について何を言うべきだったのかを示し、その後で節を改めて、『確実性』に何が見出されるのかを検討することにしたい。

さて、蝶番や世界像はどのような身分を持つのか、というこの問題に対する一つの可能な答えは、「ここに手がある」や「地球は100年前から存在している」は経験命題を表すというものである。すなわち、それらの文はそれぞれここに手がある、地球は100年前から存在している、といった事態を記述する経験命題であり、それらを真と見なすことが我々の実践の規則となっているとするのである。この答え方においては、それらの文に対し「私は知っている」とか「疑わしい」と言うことが文法違反となるという点で、それらが表す命題は特殊な身分を持つが、あくまでそれらにより表されているのは経験命題であるとされるのである。

しかし、「ここに手がある」や「地球は100年前から存在している」といった文が経験命題を表すとするこの立場には問題がある。それは、これらの文の否定が意味不明であるという問題である。いまムーアに向かって誰かが「そこには手がないかもしれない」とか「地球は100年前には存在していなかったかもしれない」とか言うとしよう。このとき、我々はその人がどのような可能性を問題にしているのか理解できないであろう¹⁰。すなわち、そのように言われても、我々には「ここに手がある」や「地球は100年前から存在している」が間違っている仕方というものが不明確なままにとどまるのである¹¹。そして、間違い方が不明確であるということは、それらの文を用いてどのような区別がなされているのかということが不明確だということである。というのも、ある文の間違いが不明確だということは、その文を真とする状況と偽とする状況の区別が不明確だということだからである。命題とはごく大雑把に言って、それを真とする状況と偽とする状況を区別する原理であり、ある文によるその区別が不明確だということは、その文は命題を表すものとしては意味不明であり、理解不能だということなのである¹²。

目下の問題に対してありうる第二の答え方は、「ここに手がある」「地球は100年前から存在している」という文は、それ自体文法規則を表す、というものである。例えば「地球は100年前から存在している」は「地球」「存在」といった語の使用規則を表しており、そのためこの文の否定は理解不可能となるというのである。

この答え方は『確実性』の解釈としては標準的であると思われるが、問題がある。先に見

たように、蝶番について「疑わしい」と言うことを文法違反のナンセンスであるとして却下することは、独断的である。そして、このことは「地球は 100 年前から存在していなかった」を文法違反のナンセンスとしてしまう解釈についても同様であろう。すなわち、「私は地球は 100 年前から存在していると知っている」「地球が 100 年前から存在しているかは疑わしい」「地球は 100 年前には存在していなかった（かもしれない）」のどれであっても、文法規則違反という観念により却下することは独断的であり、哲学的には不毛なのである。

ここまで検討した二つの回答は、文法という観念に何らかの仕方で訴えるものであった。次に文法という観念に訴えない第三の答え方を検討してみよう。それは、「ここに手がある」や「地球は 100 年前から存在している」は端的にナンセンスであるとする答え方である。すなわち、この答え方によると、それらの文は経験命題であれ、文法規則であれ、何かを表すものではなく、単なる音声やインクの染みに過ぎない。経験命題でも文法規則でもない以上、ナンセンスはナンセンスであり、それ以上でもそれ以下でもないのである¹³。

この答え方の問題は、文は特定の命題や規則を表すか端的なナンセンスであるかという二択で文を用いた言語使用を捉えているところにある。すなわち、例えば「地球は 100 年前から存在している」という文を特定の命題や規則を表すものとして理解できないというところから、その文は端的なナンセンスであると宣言されているのである。しかし、文を用いた我々の言語使用はそのような二択に回収されない、もっと多様なものでありうる。すなわち、「ここに手がある」や「地球は 100 年前から存在している」のような文は「像」を表していると考えることができるのである。

像とは特定の内容を持つ命題や規則ではなく、大雑把な物の見方のことである。我々は特定の真理条件を念頭に置くことなく、大雑把な物の見方を文を用いて提示することができる。例えば、誰かが「平等な社会が望ましい」と言うとき、必ずしもその人は平等が達成されている状態についての明確な基準を念頭に置いているとは限らないだろう。しかし、だからと言って、この文が端的にナンセンスであるということが帰結するとも限らないだろう。例えば政治哲学を学び始めた学生が対立する様々な立場のそれぞれに説得力を感じて、平等な社会が望ましいと考えるけれども、平等の基準については明確な意見を持ってないということ、十分にありうるだろう。そして、そのような学生が「平等な社会が望ましいと思います。でも、何をもちて平等が達成されたことになるのかはよくわかりません」と言うとき、その「平等な社会が望ましい」という発話が端的なナンセンスであると言うのは奇妙であろう。むしろその学生が口にした「平等は望ましい」という文は像を表していると考えることができる。すなわち、その文の精確な真理条件については不明確でありながら、大雑把な物の見方をその文により表現していると思なすことができるのである。もちろん、像を明確にし、その文に精確な真理条件を与えることができるとしたら、それは望ましいことであろう。しかし、たとえ真理条件を確定することができなくとも、像を表現するという仕方で文を使用することは可能なのである¹⁴。

「ここに手がある」や「地球は 100 年前から存在していた」という文も像を表現していると理解することができる。我々にはこれらの文がどのような真理条件を表しているのかということは不明確であり、我々はこの文をどのような状況が真とし、どのような状況が偽とす

るのか理解できない。しかし、だからと言って、これらの文が端的にナンセンスであると考えする必要はない。これらの文は現状では像であり、将来、状況が変化すれば命題を表すものとしてその意味を明確にすることができるかもしれないようなものなのである。それがどのような状況で、そこでどのような命題が見出されるかは、現時点ではわからない。というのも、現時点ではそれへの疑いを有意味とする生活のあり方を我々は所有していないということが、まさにそれらの文を蝶番たらしめるものなのだからである。

5. 『確実性』と世界像

蝶番、世界像を命題や規則ではなく、像として捉えるべきであるとする以上のような主張は、もちろん、ウィトゲンシュタインの「世界像」という用語から示唆を得ている。そして、ここまでの考察からすると、蝶番や世界像は像であるということこそが、ウィトゲンシュタインの言うべきことである。だが、もちろん、そのことは『確実性』において実際にウィトゲンシュタインがそのように言っているということを経結するわけではない。ここでは、『確実性』において、蝶番や世界像の身分をウィトゲンシュタインがどのように考えているのかということを検討してみたい。

結論から言うと、蝶番や世界像を像として捉えるという思考の方向性を『確実性』に見出すことは可能であるが、ウィトゲンシュタインがそのようにはっきりと主張しているとはまては言うことができない。『確実性』における、ウィトゲンシュタインの主題は、第一には蝶番の客観的確定性の身分——その独特の疑えなさ、非認識性、無根拠性、動物的な起源——であり、蝶番が命題なのか像なのかといった話題が集中的に考察されることはない。そのため、その点について『確実性』から整合的な単一の主張を取り出すことは困難である。ここでは、「世界像」という語が登場する『確実性』第二部と第三部を見ていくことで、ウィトゲンシュタインの思考の方向性を探ってみることにする。まず「世界像」という語が登場する最初の箇所を見てみよう。

ムーアが「知っている」と記述する文たちはすべて、誰かがその反対を信じる理由を想像することが難しいような文である。それは例えば、ムーアはこれまでの人生をほとんど地球から離れずに過ごしてきた、というような文である。ここでもまた、私はムーアではなく、私自身について語るができる。何がその反対を私に信じさせることができるであろうか？記憶やあるいは、誰かにそのように言われたということであろうか。——私が見聞きしたすべてのことは、これまでに人間は誰も地球から遠く離れたことはないということを確認させる。私の世界像の中にはその反対を支持するものは何も存在しないのである。(OC 93)

しかし、私は自分の世界像を、その正しさを確信したので受け入れたわけではない。また、その正しさを確信しているので受け入れているわけでもない。そうではなく、それは受け継がれた背景であり、それに基づき私は真と偽を区別するのである。(OC 94)

世界像を記述する文たちは、ある種の神話に属する。そして、それらの役割はゲームの規則の役割と似ている。そして、ゲームは明記された規則なしに、純粋に実践的にも学ばれうる。(OC 95)

95 節の「世界像を記述する文たち」の「文」は「Satz」であり、通常これは「命題 (proposition)」と訳されるが、そのように訳し、ウィトゲンシュタインは「世界像命題」について語っているとすることは、適切ではない。というのも、先に見たようにウィトゲンシュタインは文と命題のギャップというものに関心を払っており、ここでの「Satz」が命題を表している「Satz」であると前提することはできないのである。もちろん、「Satz」を「文」と訳すとしても、その文が命題を表すような文である可能性を排除するものではなく、ウィトゲンシュタインが世界像を命題として捉えているのかどうかということは、この箇所だけでは判定できない。ここに引用した箇所からわかるのは、世界像とは真偽を区別する際に我々が依拠するものだけということだけである¹⁵。

ところがウィトゲンシュタインは『確実性』第二部において、真偽を区別する際に我々が依拠するものを「経験命題」と呼ぶ。

ムーアは、彼がかくかくのことを知っている、と言うとき、実際には我々が特定のテストをせずに肯定するような経験命題ばかりを列挙している。従って、我々の経験命題の体系において独特の論理的な役割を持つ命題を列挙しているのである。(OC 136)

ここでの「経験命題」の「命題」もまた「Satz」であるが、この箇所ではこれを命題と訳さざるをえないであろう。というのも、「文が経験的である」と言うことはできないからである。すぐ後の 138 節でウィトゲンシュタインはそれらの命題の間違いについて語るならば、「間違い」や「真理」の役割が変化してしまうと述べている。従って、この一連の考察でウィトゲンシュタインは真偽の区別の際に我々が依拠する「経験命題」について語っていると考えるをえない。すなわち、『確実性』のこの時点ではウィトゲンシュタインは世界像を命題として捉えているのである。

ところが『確実性』の後半に進むにつれて、ウィトゲンシュタインは蝶番や世界像を経験命題として捉えることを躊躇するようになる (OC 308, 401-2)。また、我々の言語ゲームは行為とともに始まるという点を論じるとき、ウィトゲンシュタインは世界像を事実を記述する命題として捉える方向から逸れ始める。

私にとって確固としている命題 (Sätze) を私は明示的に学ぶわけではない。私はそれらを回転する物体の軸のように、後から発見することができるのである。この軸は固定されているという意味で確固としているのではなく、その周囲の運動がそれを不動のものとするという意味で確固としているのである。(OC 152)¹⁶

ここでウィトゲンシュタインが論じているのは、我々の言語ゲームは理性的な根拠付けを

待つて初めて開始されるようなものではなく、その起源において動物的であるような一つの生活様式として気付いたときにはそこにあるものであるということである¹⁷。すなわち、世界像の言語的な表現は我々の生活のあり方を振り返ったときに見出されるものであるとウィトゲンシュタインはするのである。

そして、確かにこの節の「Sätze」は「命題」と訳さざるを得ないと思われる。しかし、軸の比喩はピーター・ウィンチが指摘するように、世界像がそれ自体で存在するものではなく、我々の行為、生活があって初めて意味を獲得するというイメージを帰結する（Winch, 1998, p.198）。すなわち、ここでは世界像を記述する表現は実在的な事実を記述するものとは考えられていないのである。従って、ウィトゲンシュタインはこの箇所、どのような状況で真となりどのような状況で偽となるのが明確になっているという意味で、実在的な事実を記述する命題から「世界像命題」を区別する方向へと踏み出していると言することができる¹⁸。そして、この152節は第二部の後半に位置するが、第二部の最後から二つ目の191節においてウィトゲンシュタインは世界像が「真」や「事実と一致する」と言うことは適切なのかということの問題とし、この問題の考察は第三部の主題として受け継がれていくのである。

以上の議論は、ウィトゲンシュタインが『確実性』において、世界像を命題ではなく像として捉えていたということの根拠としては不十分であろう。実際、ウィトゲンシュタインは『確実性』の後半においても、それをほとんど命題のようなものとして語ることがある。しかし、少なくともウィトゲンシュタインに世界像を像として捉える思考の方向性を見出すことは可能であろう。というのも、ウィトゲンシュタインは世界像を表す文はどのような状況で偽となるのが明確ではないという点を認識しており、またここまで見たように、明確に事実を記述する命題とは異なる性格を持つとも考えているのである。そして結局のところ、「像」という語を用いて世界像を特徴付けたからには、ウィトゲンシュタインもそれが単なる命題とは区別されるべきものであると考えていたはずなのである。

6. 像としての常識

ムーアが「常識」と呼んだものを、ウィトゲンシュタインは『確実性』において「世界像」と言い直した。それは、我々の常識の中でも、根本的なものに関しては、単に誰もが受け入れている事実の記述というだけでは説明がつかないようなものがある、とウィトゲンシュタインが考えていたからだと思われる。すなわち、「常識」の中には命題ではなく像であるものが存在するのである。もちろん、上に見たように、『確実性』から取り出せるのは、せいぜいそのような方向性での思考の断片のみである。『確実性』においてウィトゲンシュタインが主に関わっている問題は、むしろ常識の持つ客観的確定性の身分であり、常識自体の身分ではない。実際、『確実性』第四部では「世界像」という語は姿を消し、「蝶番」のような認識に関わる役割を示す語が考察において用いられることになる。しかし、たとえそうだとしても、『確実性』から取り出しうる「像としての常識」という論点は「常識」や「知識」について哲学的に考える際に重要な一つの洞察を与えていると言っているのではないだろうか。

<注>

- ¹ 『確実性』の主題が必ずしも懐疑論の論駁といった純粹に認識論的な事柄ではないということは、しばしば指摘される点である。Koethe (2004)を見よ。本稿でも『確実性』と懐疑論の関係については特に論じない。ただし、これは単に紙幅の問題であり、『確実性』が懐疑論のような認識論的な問題について何も含意を持っていないと考えているというわけではない。
- ² 「蝶番」に関する『確実性』のコメントは OC 341, 343, 655 を見よ。
- ³ 標準的解釈としては、McGinn(1989), Stroll (1994), Moyal-Sharrock (2004), 山田 (2009)、Coliva(2010)などがある。
- ⁴ この節の以下の議論は大谷 (2012)において詳細に議論したものである。テキスト的裏づけについても、そちらを参照のこと。
- ⁵ 「記号」「シンボル」という用語は『論考』を踏襲するものである。TLP 3.31, 3.32 を見よ。後期においては「記号」と「シンボル」という用語は用いられないが、ウィトゲンシュタインにとってこの区別は一貫して重要な区別であった。Conant (1998), 大谷 (2012)を見よ。
- ⁶ そもそも抽象的理論であっても、文脈独立に何かを述べると考えることはできない。オウムが「 $e=mc^2$ 」と音声を発したとしても、相対性理論を述べているとは誰も考えないであろう。
- ⁷ 以上の論述は McGinn (1989) chap.6, Coliva (2010) pp.60-74 を参考にした。
- ⁸ 『確実性』の後半に進むに従ってムーアへの肯定的評価が増していくという指摘は Stroll (1994)、鬼界 (1998)などにある。ストロールは具体的なポイントを示していないが、鬼界は第三部に根本的な変化があるとする(鬼界 1998, pp.64-72)。彼によると、肯定的評価に加えて、ムーアに対し外在的に関わる立場から、対話相手として関わる立場——鬼界は「非対象的な態度」と呼ぶ——への変化があるとする。しかし、前節で考察したように、ウィトゲンシュタインはムーアのような哲学者を一貫して対話相手として扱い、その言葉の意味を問うというところを行っており、この点に関しては同意できない。
- ⁹ ただし、モラウエッツは知識とはなりえない方法論的命題の存在も認めている (Morawetz, 2005, pp.179-180)。
- ¹⁰ もちろん懐疑論者は「夢仮説」や「水槽の中の脳仮説」により自分がどのような可能性を問題にしているのかを示していると言うであろう。しかし、懐疑論者が実際に「可能性を提示している」と言えるかは議論の余地のある問題である。いずれにせよ、本稿では懐疑論の問題を論じる余裕はないので、ここでは懐疑論のようなラディカルな疑いや否定の可能性は無視する。
- ¹¹ 蝶番の間違い方が理解不可能であるという点については McGinn (1989) pp.113-5 を見よ。
- ¹² 「大雑把」であることの一つのポイントは、真偽の観念について何も語っていないからである。後期ウィトゲンシュタインの真理観については、大谷 (2011)において論じている。
- ¹³ この答え方はいわゆる新ウィトゲンシュタイン主義的な立場である。『確実性』に関しては、例えば Conant (1998)を見よ。
- ¹⁴ 像として言葉を使用すること自体に本質的な問題は存在しない。ただし、像を像と気付かず命題であるかのように扱うことは哲学的な混乱の源となりうる。大谷(2010) や Fischer (2006)を見よ。
- ¹⁵ OC 146-7 も見よ。
- ¹⁶ OC 248, 402 も見よ。OC 402 は行為の原初性と世界像を命題として捉えることへの躊躇に関連していることを示している。
- ¹⁷ OC 559 も見よ。
- ¹⁸ ここであらゆる命題が言語ゲーム独立に意味を持つわけではなく、152 節は世界像を通常の命題と種類が異なるものであるとする根拠とはならないと言われるかもしれない。しかし、152 節のポイントは、世界像が行為の後で事後的に発見されるという点にある。これに対し、通常の命題は言語ゲームの中で一つの行為として発話されるものでありうるのである。

Works Cited

- Coliva, Annalisa (2010) *Moore and Wittgenstein: Scepticism, Certainty, and Common Sense*, Hampshire: Palgrave Macmillan.
- Conant, James (1998) “Wittgenstein on meaning and use”, *Philosophical Investigations*, 21, pp.222-250.
- Fischer, Eugen (2006) “Philosophical pictures”, *Synthese*, 148, pp.469-501.
- 鬼界彰夫 (1998) 『『確実性について』の主題と構造 (中)』、『言語文化論集』第 47 号、筑波大学言語・現代文化学系、pp.53-96.
- Koethe, John (2004) “Wittgenstein and epistemology”, in *The Third Wittgenstein: The Post-Investigations Works*, D. Moyal-Sharrock(ed.), Hampshire: Ashgate.

-
- McGinn, Marie (1989) *Sense and Certainty: A Discussion of Scepticism*, Oxford: Blackwell.
- Morawetz, Thomas (2005) “The context of knowing”, in *Readings of Wittgenstein’s On Certainty*, D. Moyal-Sharrock & W H. Brenner (eds.), Hampshire: Palgrave Macmillan.
- Moyal-Sharrock, Danièle (2004) *Understanding Wittgenstein’s On Certainty*, Hampshire: Palgrave Macmillan.
- 大谷 弘 (2010) 「ウィトゲンシュタインの哲学的方法」、『哲学雑誌』、第 125 卷 (797 号)、有斐閣、pp.183-202.
- (2011) 「『哲学探究』の真理論」、『武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要 The Basis』、第一巻、pp.119-133.
- (2012) “The character of hinges: Transcending dichotomy in interpretation”, a paper given at the International Conference “In Wittgenstein’s Footsteps”, held on 14-17th of September 2012, at University of Iceland.
- Stroll, Avrum (1994) *Moore and Wittgenstein on Certainty*, New York & Oxford: Oxford University Press
- Winch, Peter (1998) “Judgement: Propositions and Practice”, *Philosophical Investigations*, 21, pp.189-202.
- Wittgenstein, L (1922) *Tractatus Logico-Philosophicus*, [TLP], London & New York: Routledge.
- (1969) *On Certainty*, [OC], G.E.M. Anscombe and G.H. von Wright (eds.), Oxford: Blackwell.
- 山田圭一 (2009) 『ウィトゲンシュタイン最後の思考——確実性と偶然性の邂逅』、勁草書房.